The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自記式認知行動特性尺度の短縮版開発 : WAIS-III との関連から
Author(s)	平井, 啓; 山村, 麻予; 金子, 茉央
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2024, 50, p. 35-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94724
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

自記式認知行動特性尺度の短縮版開発
―WAIS-Ⅲとの関連から―

平井　啓・山村　麻予・金子　茉央

目　次

１．問題意識
２．方法
３．結果
４．考察

自己記述式認知行動特性尺度の短縮版開発
―WAIS-Ⅲとの関連から―

平井　啓・山村　麻予・金子　茉央

１．問題意識

近年、「働き方改革」という言葉に代表されるように、労働者の健康を保持したうえでの産業発展に注目が集まっている。とくに、身体の健康だけでなく、心の健康にも焦点があてられており、労働者のストレスマネジメントは一般的にも関心度が高い。厚生労働省が発表した「令和４年労働安全衛生調査（実態調査）」によると、メンタルヘルス不調により、連続１ヶ月以上休養または退職した事業所の割合は 13.3% であり、メンタルヘルス対策に取り組んでいる事業者は 60% を超える（厚生労働省，2023）。また同じ調査では、労働者の 82.2% が強い不安、悩み、ストレスが、「仕事や職業生活に関すること」から発生していると回答している。仕事や職業生活におけるストレッサーは、正社員であれば仕事の量や責任、契約社員や派遣労働者であれば雇用の安定性など、その働き方によっても多様であり、さらに個人差も大きい。このように、労働者のストレスマネジメントは喫緊の課題であり、事業所の多くはストレスチェック制度やメンタル不調者への特別配慮などを実施するなど、さまざまな取り組みを実施している（厚生労働省，2020）。

ストレスを起こす源であるストレッサーは、3 つに大別できることが知られている。第一に物理的ストレッサー、第二に化学的ストレッサー、第三に心理･社会的ストレッサーである。労働者に当てはめて具体例を述べる。物理的ストレッサーとは、作業する場所の気温や湿度、パソコンをみる時間、照明の明るさといった物理的な環境刺激が当てはまる。つづいて化学的ストレッサーは、締め切った部屋の酸素濃度や、喫煙者がそばにいることによる受動喫煙など、化学的な刺激が該当する。職種によっては有機溶剤や金属などを扱う場合もあり、このようなものの刺激もあてはまる。最後に心理・社会的ストレッサーは、人間関係や業務で発生する問題など、社会生活で生じる多くの刺激が該当する。Lazarus & Folkman（1984）は、このようなストレスは個人と環境の両者の相互作用によって生じるものであるという「トランスアクショナルモデル」を提唱している。この理論では、ストレッサーに対して主観的な認知的評価を行うことが指摘されている。一次的評価は、環境からの刺激（e.g., 人間関係のトラブル、長時間労働など）が自分にとって脅威をもたらすか、対処が必要かといった状況評価のことであり、二次的評価は、

その脅威に対して適切な対処ができるかどうかの評価のことを指す。この２つの認知的評価は、個人の特性や要因がさらに影響を与えている。つまり、同じ環境からの刺激であっても、ある人は「たいしたことはないから放っておいてよい」と認識し、またある人は「大変なトラブルだ、対処する努力をせねばならない」と認知する。この違いは個人の性格や発達特性、社会経験などから生起すると考える。そこで、本研究では、ストレス評価や対応に影響を与える個人特性について焦点を当てる。

ストレス評価に影響を与える個人特性は様々あるが、たとえば岡安（1992）は Y-G 性格検査の各因子と認知的評価の間に関連を指摘し、森田（2003）は普段の悩み方といった日常行動とテスト場面のストレスの関連を示した。このように対象者が自分自身の状態を回答する質問項目での個人特性測定は、実施が簡易であり、集計・分析も過度な負担を課さないため、広く実施されている。

個人特性を測定する方法には、自らについて回答する形式の質問紙のほか、性格や認知的な特性、日常の行動の特性をアセスメントするための心理検査がある。測定対象により様々な検査が開発され、それに関する検討が行われているが（たとえば Axelrod & Ryan, 2000）、なかでも学習によって獲得された知識やその応用が可能となる能力である「知能」を測定する知能検査は、幅広い心理臨床で活用されている。これは、それぞれの検査の特徴はあるものの、多くが包括的な能力をアセスメントできることが理由の一つであると考えられる。したがって、知能検査のようなアセスメント方法を労働者の特性を知るための手法として適応すると、その人にあったストレスコーピングや業務への取り組みについての支援にもつながることが可能となるだろう。しかしながら、現場で知能検査をふくむ心理検査を個別に実施することは容易ではない。それは、多くの知能検査は臨床心理士や公認心理師など、専門家が時間をかけて実施したうえで、その結果の読み取りや分析には高い専門性が必要であり、時間的・労力的なコストが多大にかかるためである。したがって、労働現場における一般就労者に対する調査などのスクリーニングには、自己記述式のアンケート調査が広く用いられてきた。

そこで、山村ら（2020）は、自己記述式の認知行動特性尺度を開発した。これは、性格や認知特性、行動特性など、ストレス認知に影響を与える様々な要因について、それぞれを独立した尺度ではなく、一つの質問リストで測定することが可能な尺度である。この尺度は、労働場面や日常生活に現れる事象を項目として扱い（e.g.「日常生活や仕事において自分の失敗やミスで困ることが多い」「複数の物事やプロジェクトがあるときでも、必要なものだけに意識を向けて集中することができる」）、比較的回答しやすい尺度であり、職場での適応に関する個人の認知的行動特性を調べることが可能である（村中, 2018）。先の研究では、内的整合性の検討を行った上で、脳疲労尺度（平井ら , 2020）や QIDS-J（藤澤ら , 2010）などの抑うつ尺度との関連性があることが示されているが、内容妥当性の検討を行う必要がある。さらに、これの追検討を行った山村ら（2023）において、認知行動特性尺度をもとに対象者を 8 つのクラスターに分け、特徴によって抑う

つの度合いが異なることを示している。しかし、こちらも信頼性ならびに妥当性検討が必要であることを今後の課題としてあげている。

したがって、本研究では、認知行動特性を様々なテストを組み合わせて測定する知能検査であるウェクスラー式知能検査のテスト結果と、認知個人特性尺度の関連性を検討することで、その妥当性を検討する。さらに、この尺度は26項目から構成されることから、ストレスの度合いや疲労度が高い被験者には回答の負担が高い可能性が考えられるため、知能検査との関連をもとに短縮版尺度を作成する必要がある。これが可能となれば、認知行動特性が平均よりも大きく異なる人を見つける簡易なスクリーニングツールとして機能すると考えられる。認知行動特性が一般的な人と大きく異なる、つまり「凹凸が大きい」人は、ストレスの度合いが高いことが先の調査（村中，2018；山村ら，2020）からも明らかであり、他者からの支援や環境調整の実施、さらには精神科での治療や心理療法といったプロケアに早い段階で繋げることも可能となる。

本研究では、すでに開発した認知行動特性尺度（山村ら，2020；山村ら，2023）と、臨床現場で広く使用されている知能検査であるWAIS（日本語版ウェクスラー式知能検査の成人版）の関連性を検討し、その妥当性の検討と、短縮版の認知行動特性尺度の開発を行うことである。これにより、労働者の認知行動特性の指標を整理し、要支援者のスクリーニング等に活用することが期待できる。

２．方法

研究協力者　本研究に協力を得た関西圏のメンタルヘルス専門機関（複数）を受療し、精神科、リワーク（復職支援）、リハビリテーションなどで治療・支援を受けている成人のうち、研究参加の同意を得た22名（男性21名、女性1名。平均年齢43.32歳，SD=9.67）を本研究への参加者とした。

手続き　就労支援を行うメンタルヘルス専門機関に勤務する心理士複数名に対して、研究目的と実施内容に関する説明を行い、協力を依頼した。うち、2名の心理士から協力が得られることとなった。なお、協力を得たすべての調査協力機関では、患者の希望や同意があった場合に、各組織が保有するキットを用いてウェクスラー式検査（WAIS-ⅢまたはWAIS-Ⅳのいずれか。以下、WAISと表記）を実施している。これを踏まえ、検査担当者がWAISを実施する際、あわせて本研究で使用する質問紙への回答を依頼した。質問紙を依頼するときに、研究の目的やその内容、匿名性が担保されていること、ならびに本研究は任意での参加協力であり、回答途中での中断や回答後の参加取りやめの意思表示が可能であることとその方法を口頭並びに文書で示し、同意取得できたもののみ、研究の対象とした。研究対象となった場合は、匿名化のうえIDを付されたWAISのデータと、同じIDが付いた質問紙を検査実施者がとりまとめ、研究解析者（第１、２、３著者）が受け取った。これらはすぐに電子データ化し、質問紙自体は廃棄の上、デー

タは暗号化が可能なHDに保存した。協力が得られない場合は、WAISのみを実施し、研究者はデータ提供ならびに調査依頼の事実報告を受けていない。そのため、協力依頼の総数と参加率は不明である。

調査実施時期は、2019年12月から2021年3月までであった。

調査項目　調査はアンケート調査（自己記述式）と、検査者による心理検査の二つを実施した。

2.1 所属などを問う項目

アンケートの表紙に、性別（男性・女性・その他）、年齢、記入日を回答する欄を設け、研究参加者自らについての記述を求めた。

2.2 認知行動特性尺度

山村ら（2020）の「認知行動特性尺度」26項目を4件法（「1. あてはまらない」～「4. あてはまる」）で実施した。26項目の構成は、「第1因子：遂行機能因子」6項目（e.g. 人から仕事の効率が悪いと言われることがある）、「第2因子:注意機能因子」7項目（e.g. 複数のやるべき事柄があるとき、バランスよく仕事を切り替えることができる）、「第3因子:不安傾向、自己帰属因子」4項目（e.g. もともと不安になりやすい性格である）、「第4因子:抑制機能因子」4項目（e.g. やらないといけないことをよく先延ばししてしまう）、「第5因子：ソーシャルコミュニケーション因子」5項目（e.g. 人と意見が合わないときに、自分とは異なる味方や感じ方があることを理解するのが難しい）であった（項目内容については資料を参照）。

2.3 WAIS-Ⅲ

調査協力施設（医療機関）が有している検査キットを使用し、検査を実施した。計画立案当初はⅣでの測定を予定していたが、機材の準備やテスターの負担を加味し、Ⅲのみの使用とした。

テストは「単語」「類似」「知識」「理解」「算数」「語音」「配列」「完成」「積み木」「行列」「符号」を実施し、分析にはWAIS-Ⅲの計算式をもとに算出した合成得点である、VIQとPIQ、FIQ、そして下位得点のVC、PO、WM、PSを用いた。

解析　分析にはIBM SPSS Statistics28を使用した。

倫理的配慮　調査は「人を対象とする生命科学･医学系研究に関する倫理指針」に則り、実施した。また、データは個人が特定されることがないよう、ID番号のみを付した状態で研究者へ提供された。なお、本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科教育学系研究倫理審査委員会にて承諾を得たうえで実施した（審査番号：19049）。

３．結果

分析対象　研究参加の同意を得た 22 名（男性 21 名、女性 1 名、平均年齢 43.32 歳、SD=9.67）のデータを精査し、欠損値や WAIS の遂行での問題が確認されなかったことから、すべてを分析対象とすることとした。

分析方法　研究参加者数が多くないことから多変量解析を実施せず、記述統計とスピアマンの積率相関分析のみを行った。

WAIS と尺度得点との相関分析　内的妥当性を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出した（Table 1）。いくつかの項目と WAIS の各変数との間に有意な相関が確認された。

相関分析の結果から、WAIS の下位尺度や合成得点と、複数の関連が見られる項目を抽出した。これらの項目は、WAIS で測定される能力が複合的に関連している行動を表している。特定の行動の有無（得意・不得意）で、認知特性の凸凹を検出することが考えられる。その結果、複数の指標と中程度以上の相関が見られる項目を 6 つ抽出することができた。

Table 1 各変数間の相関係数

	遂行機能1	遂行機能2	遂行機能3	遂行機能4	遂行機能5	遂行機能6	注意機能1	注意機能2	注意機能3	注意機能4	注意機能5	注意機能6	注意機能7
VIQ	-.286	-.426*	-.174	-.235	-.144	.386 †	.296	.338	-.025	.134	.317	.467*	-.237
PIQ	-.124	-.176	-.115	-.023	-.146	.295	.164	.254	.066	.037	.197	.346 †	.079
FIQ	.238	.165	.109	.295	-.166	.056	-.034	.024	.107	.038	.009	.218	.397 †
VC	-.232	-.315	-.160	-.172	-.083	.294	.199	.208	-.133	.117	.293	.434*	-.179
PO	-.251	-.278	-.227	-.082	-.143	.359 †	.233	.326	.009	-.042	.263	.263	-.029
WM	-.241	-.422*	-.109	-.312	-.127	.286	.161	.208	.208	-.056	.126	.307	-.190
PS	.023	-.191	.078	-.263	.037	-.221	-.134	-.121	-.052	.021	.033	-.218	-.363

	不安・帰属1	不安・帰属2	不安・帰属2	不安・帰属4	抑制機能1	抑制機能2	抑制機能3	抑制機能4	コミュ1	コミュ2	コミュ3	コミュ4	コミュ5
VIQ	-.097	-.362 †	.060	-.076	-.069	-.350 †	-.254	-.376 †	-.420*	-.502*	-.156	-.376 †	-.074
PIQ	-.064	-.258	.126	.126	.165	-.107	-.076	-.309	-.187	-.111	-.083	-.415*	-.210
FIQ	.199	.077	.092	.328	.426*	.055	.177	.016	.031	.247	-.029	-.325	-.262
VC	-.161	-.346 †	.226	-.026	-.001	-.316	-.208	-.303	-.333	-.352 †	-.180	-.365 †	.052
PO	-.148	-.326	.027	.031	.047	-.142	-.096	-.453*	-.214	-.158	-.136	-.322	-.188
WM	-.184	-.339	-.237	-.182	-.246	-.226	-.260	-.391 †	-.329	-.536**	.004	-.197	-.083
PS	.478*	.073	-.272	-.117	-.175	-.211	.100	.221	-.256	-.111	.035	.277	.404 †

注：「遂行機能」、「注意機能」、「不安・帰属」、「抑制機能」、「コミュ」は各因子名の略であり、番号はそれぞれ項目番号を示す。

(**p<.001, *p<.05, †p<.10)

認知行動尺度短縮版の検討　相関分析の結果から、合成変数であるFIQ、VIQ、PIQおよび下位尺度のいずれかと、複数の有意または有意傾向の相関を示した項目を抽出したところ、7項目となった。この7項目について、下位得点も含めて関連が見られた変数を抽出して整理した表がTable 2である。これらの項目は、WAISとの関連から、認知行動特性の弁別に有用であると考えられる。また、分析対象者数は多くないものの、中程度の相関が確認できたことから、ある一定程度の妥当性が確認できたと言える。

Table 2　抽出した7項目と関連のある変数

項目	関連のあった変数
人から仕事の効率が悪いと言われることがある（遂行機能2）	VIQ, WM（いずれも負）
人と比べると忘れ物が多いほうである（遂行機能6）	VIQ,PO（いずれも正）
職場の同僚や友人と、近づきすぎず、遠ざけすぎず距離を保つことが得意である（注意機能6）	VIQ, PIQ, VC（いずれも正）
自分のやったことを自分自身で振り返ったり、確認したりする習慣がある（不安・帰属2）	VIQ, VC（いずれも負）
興味の持てない仕事はなかなか手をつけられない（抑制機能4）	VIQ, PO, WM（いずれも負）
状況や文脈から自分に求められていることを理解して行動することが難しい（コミュ2）	VIQ, VC, WM（いずれも負）
自分の感情の動きがその時は分からず、後になってわかることがよくある（コミュ4）	VIQ, PIQ, VC（いずれも負）

注：「遂行機能」、「注意機能」、「不安・帰属」、「抑制機能」、「コミュ」は各因子名の略であり、番号はそれぞれ項目番号を示す。

抽出した7項目とWAISの合成変数のそれぞれを精査したところ、「自分のやったことを自分自身で振り返ったり、確認したりする習慣がある（不安・帰属2）」と「自分の感情の動きがその時は分からず、後になってわかることがよくある（コミュ4）」の相関係数のパターンが類似していた（VIQ、VCとの間にそれぞれ中程度の負の相関）。そこで、PIQとの相関も確認された後者を採用した。

さらに、Table2で示した項目群のなかには、PSとの相関が見られる項目がなかったことから、包括的に認知行動特性を抽出する尺度とするため、PSと有意な相関が見られた「もともと不安になりやすい性格である（不安・帰属1）」を追加することとした。これによってWAISの合成変数のいずれとも関連のある7項目を採用した（Table 3）。情報の統合や情報の取り入れなどの困難さをみる際、これらの項目を尋ねることで、凸凹の大きさを検出できる可能性が示唆された。

Table 3　短縮版プロトタイプ項目案

	項目
1	人から仕事の効率が悪いと言われることがある
2	人と比べると忘れ物が多いほうである
3	職場の同僚や友人と、近づきすぎず、遠ざけすぎず距離を保つことが得意である
4	自分のやったことを自分自身で振り返ったり、確認したりする習慣がある
5	興味の持てない仕事はなかなか手をつけられない
6	状況や文脈から自分に求められていることを理解して行動することが難しい
7	もともと不安になりやすい性格である

4．考察

本研究は、これまでの研究で開発された認知行動特性尺度について、既存の知能検査である WAIS-Ⅲとの関連からその妥当性を検証すること、さらに短縮版の認知行動特性尺度を開発することであった。専門機関に通院する 22 名の一般成人から協力を得て分析を行った結果、ある一定程度の妥当性を確認し、7 項目からなる短縮版尺度案を抽出することができた。

本研究での重要な知見は、認知行動特性尺度の各項目と、WAIS で得られる合成変数との関連が明らかになったことである。これまでの研究では、調査対象者自らが回答する形式での実施であったが、さまざまなテストを組み合わせて構成される WAIS-Ⅲの結果との相関関係を確認できたことにより、その妥当性を一定程度確認できたといえる。最終的に採用した 7 項目は、いずれも WAIS の結果得られる合成得点との中程度の相関があり、ある特定の認知特性の高さまたは低さが、自己記述式の項目から予測できる可能性が示されたといえる。たとえば、「人から仕事の効率が悪いと言われることがある」という項目は、VIQ ならびに WM との間に中程度の負の相関が見られた。この項目には背景要因がいくつも考えられるが、WAIS との相関分析から、業務管理や複数のタスクを処理するために必要なワーキングメモリーと言語 IQ との関連が示唆された。また、一方で「人と比べると忘れ物が多い方である」という項目は、VIQ および PO との間に有意傾向ではあるが正の相関が認められた。遂行機能因子のなかでは短期記憶の弱さを測定する想定されていた項目だが、WAIS との相関分析では言語 IQ、知覚統合との関連が示されている。これは、知覚統合の得点の高さが、忘れ物などのミスの気づきやすさにつながっているのではないかと解釈できる。このように、自己記述式のアンケート項目と WAIS の合成得点との相関が明らかになったことで、尺度の内容的妥当性の検討が可能となったことは重要であるといえる。

第二の重要な点として、これまで 26 項目であった認知行動特性尺度を短縮版として 7 項目のプロトタイプ案を作成できたことである。認知行動特性尺度をはじめとする多く

の心理尺度は、自分自身の日常を振り返って採点するなど、ある一定のメタ認知能力を必要とし、メンタルヘルス不調を抱えていたり、認知特性の凹凸が大きかったりする一部の人には、認知的負荷の高いものである。本研究では、WAIS との関連が見られた項目を抽出することによって 7 項目からなる短縮版プロトタイプ案を開発することができたため、その負荷を下げることも可能になると考えられる。また、テストを受けること自体が､時間的･経済的そして心理的にもハードルの高い知能検査である WAIS を受検し、より詳細に認知特性を知る必要があるのかといったスクリーニングにも、短縮版プロトタイプ案は活用できるのではないかと考えられる。

本研究の限界は、二点にまとめることができる。第一に、調査協力者の偏りである。今回は WAIS の実施しやすさを優先し、クリニックをはじめとした専門機関に通院している人、つまりメンタル不調を訴える患者に協力を求めた。そのため、精神的健康度の低い人やそもそも認知特性の凸凹がある人が研究協力者となり、さらに人数も数多くは集めることができなかった。今後は、より対象を広げ、多様な人を対象とした検証が必要である。第二に、ウェクスラー式知能検査の最新版である WAIS- Ⅳが使用できなかった点である。実施上の都合により最新の検査をすることができなかったため、Ⅳ版での検査結果との整合性の確認が必要である。

本研究では、認知行動特性尺度短縮版を開発し、WAIS- Ⅲで示される合成変数との関連が明らかとなった。この知見を活用することによって、予防的支援としてのスクリーニングが可能となると考えられる。これは、認知行動特性尺度をあらかじめ収集することによって、その特性間の差の大きさや個人の特徴を自他ともに理解することができ、それに応じての支援が可能なることを表している。必要であれば WAIS のような知能検査でより詳細に特性を調べるといった評価的援助に繋げることも可能であるし、特性に応じた環境や業務への配慮を行うことも可能となる。このように、今回得られた知見は、精神的不調を予防するために有用であるといえる。

付記

研究の遂行にあたり、調査の実施にあたっては、佐田あゆ美先生ならびに坂東潮子先生に、尺度項目の開発ならびに整理に関しては谷向仁先生と足立浩祥先生にご協力いただきました。深く御礼申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 19H01762 の助成を受け実施しました。

引用文献

Axelrod, B. N. & Ryan, J. J. (2000), Prorating Wechsler Adult Intelligence Scale-III summary scores, Journal of clinical psychology, 56(6), 807-811. https://doi.org/10.1002/(SICI)1097-4679(200006)56:6<807::AID-JCLP9>3.0.CO;2-N

平井 啓・足立 浩祥・村中 直人・小林 清香・小川 朝生・谷向 仁・谷口 敏淳・山村 麻

予・原田 恵理・藤野 遼平・堀井 健司・桜井 なおみ・立石 清一郎 (2020), 治療と職業生活の両立支援における高ストレス状態の測定ツールとしての脳疲労尺度の開発 , Palliative Care Research, 2020, 15(Suppl.) p.S692

藤澤 大介・中川 敦夫・田島 美幸・佐渡 充洋・菊地 俊暁・射場 麻帆・渡邉 義信・山口 洋介・舳松 克代・衛藤 理砂・花岡 素美・吉村 公雄・大野 裕 (2010), 日本語版自己記入式簡易抑うつ尺度（日本語版 QIDS-SR）の開発 , ストレス科学 , 第 25 巻 1 号 , 43-52 頁

厚生労働省 (2023), 令和 4 年「労働安全衛生調査（実態調査）」の概況　厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/r04-46-50b.html（参照 2023 年 9 月 28 日）

厚生労働省 (2020), 事業場におけるメンタルヘルス対策の取組事例集～いきいきと働きやすい職場づくりに向けて～　厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000055195_00007.html（参照 2023 年 9 月 28 日）

厚生労働省 (2019), 平成 30 年度労災疾病臨床研究事業費補助金研究報告書　厚生労働省 Retrieve from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/rousai/hojokin_00033.html（参照 2023 年 9 月 28 日）

Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). Stress, appraisal, and coping, Springer publishing company.

村中直人 (2018), 労働者の内的特性と職務の適合に資する日常生活と仕事にぽける認知行動特性尺度の開発，労災疾病臨床研究事業補助費「治療と職業生活の両立におけるストレスマネジメントに関する研究」平成 30 年度総括・分担研究報告書，27-30 頁

森田美登里 (2003),「対処と普段の悩み方が心理的ストレスに及ぼす効果－テスト場面におけるストレス・モデルの分析－」,『九州大学学術情報心理学研究』第 4 巻 , 215-222 頁

岡安 孝弘 (1992),「大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用」『健康心理学研究』, 第 5 巻 2 号 , 12-23 頁

山村 麻予・平井 啓・村中 直人・上木 誠吾・原田 恵理・藤野 遼平 (2020), 成人期における生活・業務の認知行動特性尺度の開発―勤労パフォーマンスとストレスマネジメントの観点から , 日本発達心理学会第 31 回大会

山村 麻予・金子 茉央・平井 啓 (2023), 一般就労者の認知行動特性のおけるセグメンテーション開発―生活・業務場面における個人特性尺度の検討 , 日本パーソナリティ心理学会第 32 回大会

資料　認知行動特性尺度の項目

遂行機能因子	
1	仕事の仕方や進め方で同僚や家族から注意されることが多い
2	人から仕事の効率が悪いと言われることがある
3	複雑な指示をすぐに理解することが難しい
4	日常生活や仕事において自分の失敗やミスで困ることが多い
5	同時に複数のことを考えて動くことが苦手だ
6	人と比べると忘れ物が多いほうである
注意機能因子	
1	複数のやるべき事柄がある時、バランス良く仕事を切り替えることができる
2	複数の物事やプロジェクトがあるときでも、必要なものだけに意識を向けて集中することができる
3	切羽詰まった状況であっても、なんとかするべきだし、なんとかできると思っている
4	ルールや規則性を見つけ、それを応用していくのが好きだ
5	具体的な目標と計画を立ててから物事に取り組むことができる
6	職場の同僚や友人と、近づきすぎず、遠ざけすぎず距離を保つことが得意である
7	一度聞いたことはすぐに覚えることができる
不安傾向、自己帰属因子	
1	もともと不安になりやすい性格である
2	自分のやったことを自分自身で振り返ったり、確認したりする習慣がある
3	問題が生じたとき、自分のせいだと考えやすい
4	人に仕事を任せるよりも自分がやった方がラクだと思う
抑制機能因子	
1	やらないといけないことをよく先延ばししてしまう
2	仕事や日常生活で、予定を立てて動いていても時間内におさまらないことが多い
3	選ぶことや決めることにいつも困難を感じる
4	興味の持てない仕事はなかなか手をつけられない
ソーシャルコミュニケーション因子	
1	人と意見が合わないときに、自分とは異なる見方や感じ方があることを理解するのが難しい
2	状況や文脈から自分に求められていることを理解して行動することが難しい
3	仕事や日常生活で急なやり方の変更を求められると、混乱して上手くできなくなってしまう
4	自分の感情の動きがその時はわからず、後になってわかることがよくある
5	自分の得意なことと苦手なことがあまりよくわかっていない

Development of a Shortened Self-Report Cognitive-Behavioral Traits Scale: Insights from the relationship with WAIS-III

Kei HIRAI, Asayo YAMAMURA, and Mao KANEKO

In this study, we investigate a previously developed cognitive-behavioral traits scale, with two primary objectives: first, to confirm the scale's content validity, and second, to develop a prototype of a shortened scale. To accomplish these goals, we worked with 22 psychiatric patients, who took the WAIS-III intelligence test and participated in a questionnaire survey. We subjected the collected data to a correlation analysis. The analysis uncovers significant correlations between multiple items and variables from the intelligence test, thereby affirming a degree of content validity for the scale. Based on these correlation results, we developed a prototype version with seven items that exhibit moderate intercorrelations. Given their relation to diverse variables, this prototype provides a simple, efficient tool for individuals to evaluate their traits and determine if an intelligence test is necessary. 131 words.

Key words: Cognitive-Behavioral Traits Scale, WAIS-III, exploratory research